



心を寄せる（8）

国境なき医師団（MSF）の広報誌に載せてあった声（手紙）を届けます。

皆様こんにちは、看護師の白川優子です。2024年11月、国境なき医師団（MSF）での19回目の派遣に行ってきました。場所はイスラエル軍からの激しい空爆によって、市民の生活が一変してしまったレバノンです。派遣された病院は高台に位置し、首都ベイルートの市街が一望できました。空と海、そして無数の白い建物が立ち並ぶ美しい風景のなかで、いくつもの爆心地から破片物が吹き飛んでいました。一つ、そしてまた一つ。爆弾が落ちてくるたびに地の底から突き上げられるような衝撃を全身で受け止めながら、私たちは目の前の患者さんの治療を続けていました。

紛争地で働くとき、空爆の振動も銃撃の音も私は怖くありません。怖いのは、その空爆や銃撃で被害に遭った患者さんたちを目の当たりにした時です。手から足から、腹部から、頭部から、顔面から血液がしたり、骨が砕け、裂けたお腹から内臓が飛び出しています。私たちと同じ人間をこんな姿にしてしまうなんて、戦争とはなんて恐ろしく愚かな行為なのだと毎度のことながら立ちすくんでしまいます。私たち外科チームは、患者さんの身体に突き刺さった破片の一つ一つを取り除き、お腹の中の銃弾を取り出し、損傷した内臓を修復し、砕け散り突き出した骨を固定して、潰れてしまった手足の切断を行います。

小さな時から活動にあこがれ続けてきた私は、入団して今年で15年になりました。人道支援とは、へき地や難民キャンプでの活動がメインだとずっと思い込んでいました。ところが、いざ入団してみると声がかかるのは紛争地ばかりでした。テレビで見た栄養失調の子ども姿が目には焼き付いていたせいか、紛争地も活動現場に含まれるとは当時の私にとっては想定外のことでしたが、紛争地こそ医療が足りていない場所の一つだということがすぐに理解できました。尊敬し、長年追いつけてきたMSFで働ける喜びは何にも代えがたいものがありました。現地に行けば必ず救える命があり、患者さんが取り戻した笑顔に癒され、やりがいを感じることができます。・・・

「なぜ紛争地に行くのですか?」。これは何度でも聞かれてきた質問です。いつも言葉でうまく表せないのですが、この手紙を書くいま、心を占めているのはレバノンの病院のベランダに立つ病院長と看護部長のうしろ姿です。自分たちの街、自分たちが守るべき市民の命が、病院の目の前で破壊されていく様子を黙って見つめていました。二人の背中からは、悲しみや怒りを超えた絶望感が伝わってきて、私はその場で心が引き裂かれてしまいました。轟音と振動の中、それでも医療活動をしている現地の医師や看護師の姿を世界の誰が知り得るかと思うと、私は何もせずにはいられなくなるのです。・・・

2025年10月

戦地や紛争地に行き、大変な状況の中で困っている人たちに手を差し伸べておられる多くの方がおられます。私たちもそのような状況を理解し、心に置きながら、できることがあればお手伝いをしたいものですね。

この手紙をもとに、親子で話し合ってみませんか。戦争の現実を知り、困った人たちのことを考えるきっかけになるのではないのでしょうか。

青少年育成センター指導員 藤村